

第35回全米アフリカ学会学術大会に出席して

吉 田 昌 夫

アメリカのアフリカ研究者のほぼ全員が会員となっている全米アフリカ学会の年次大会が、1992年11月20日から23日までの4日間にわたって、太平洋岸のシアトル市で開催された。今大会の主催者から、特に日本のアフリカ研究者に対して積極的に研究発表を行ってほしいという呼びかけがあり、これに応じて、日本から15名の参加者があり、6つの分科会のセッションを組むことになった。大会全体の参加者は1,000名を越し、分科会（講演会形式のものも含め）の総数は181にのぼった。ちなみに全米アフリカ学会会員数は約2,400名で、日本アフリカ学会員数が最近急成長しているにもかかわらず、約500名にとどまっているのに比べれば、はるかに強力な学会である。

全米アフリカ学会の特徴は、政治学の分野が強いのが特徴である。今大会においても、地域的紛争解決の問題や民主化の問題、草の根政治における女性の役割、南部アフリカの政治移行の問題などがとり上げられ、熱い議論が交わされていた。このようなトピックと並んで参加者の注目を集めていたものに、アフリカにおける世銀の役割についてのいくつかの分科会があった。これは現在多くのアフリカ諸国が経済危機に陥り、世銀の管理下に経済再建を試みているが、その世銀自体の政策の是非を政治経済的視点から検討を加えるというもので、カレントなトピックとして多くの参加者を集めていた。これらの分科会は通常2時間のセッションで4名ほどの

報告者がおり、同時平行して12セッションほどが別々の会議室で進行しているのです。参加したい分科会が重なり、聴きたい報告を逃してしまうことも多いのが残念であった。

この他のトピックとして目立ったものに、大学レベルでどのように「アフリカ」を教えたらいいかという問題があった。「アフリカを教える——クラスルームとその先への戦略」とか、「高等学校および大学のアンダーグラジュエーツのためのアフリカ教育カリキュラム」とか、興味ある題名をつけられた分科会がいくつかあり、私もできるだけそれらの報告を聴いた。この現象は、最近アメリカで黒人の国民（今はアフリカン・アメリカンと呼ばれることが多い）の文化的アイデンティティーを問い直そうとする動きが盛んになり、彼らの出身地域としてのアフリカを再評価してアメリカ人に認識させようとする努力の一環として、アフリカに関する教育が重要視されるようになったものである。それは主として歴史学の分野で盛んになっており、アフリカの過去の輝かしい歴史を理解できるようなカリキュラムを世界史の授業の中に組むべきだという主張になって現れてきている。それと同時にアフリカン・アメリカン自身が、もっと自尊心を持ってアメリカの厳しい社会の現実の中で生きてゆけるよう自己教育することが大切だと考えていることも含まれている。この教育はほぼ必然的にクラスルームの中だけに留まるものではなく、常に地域社会に働きかける活動（Out-reach）と組み合わせた問題として議論されていた。

この流れは、全米アフリカ学会が新しい性格を持つようになったことを示すものである。実は、全米アフリカ学会は、アフリカ民族主義運動の盛んな1960年代に生まれたこともあって、その民族主義の意識を形成するのに大きな影響を与えたパンアフリカニズムと、この思想を唱導したアメリカ大陸・カリブ海地域の黒人を主要な研究対象として発足したのである。しかしブラックパワーという名の嵐の吹き荒れた1960年代末から70年代初めにかけて、黒人を対象とするアフリカ・アメリカ学と、全米アフリカ学会

を拠り所とする、より「客観的」なアフリカ研究とは分裂してしまった。1973年の大会以後、アフリカ・アメリカ学の側は、全米アフリカ学会から離れて独自のグループをつくったように見えた。しかし今回の大会で顕著に現れたように、最近また両者は接近しつつあり、そしてその接点が、世界史の中でアフリカ史をいかに理解するか、という問題領域にあると考えられる。

ひるがえって日本の歴史学会の現状を見ると、アフリカ史をめぐる状況は一向に変わっていない。日本史、東洋史、西洋史という地域三分割の建前が幅をきかせて、アフリカはそのどこにも市民権を得ることができず、無視されたままになっているように思える。史学雑誌などがようやく一年の回顧と展望を行う時に、「アフリカ」という項をもうけるようになってきたが、日本の高校の世界史の教科書にアフリカが登場するのは、せいぜい5ページぐらいなものであろう。同じような悩みが、東南アジア、オセアニア、南アメリカ、ロシアなどの歴史に関してもあるのかも知れないが、アフリカ史の問題は、中でも最も深刻なものであり、アメリカにおける議論が、もう少し日本でも注目されるようになることを期待したい。

日本からの全米アフリカ学会での報告者が15名という多数にのぼったのは、初めてのことであったが、それを可能にした理由は、数年にわたって何人かのアメリカ人学者が、日本におけるアフリカ研究について関心を持ち、今回積極的な招待をしてくれたこと、同時に日本側にもその働きかけを受けて立とうとするグループが育ってきたことにあった。すでに1986年に、当時の日本アフリカ学会会長の山田秀雄教授が大会に出席して先鞭をつけ、その後続けて筆者を含む何人かの日本人研究者が、大会で日本におけるアフリカ研究の一端を紹介し、また同学会機関誌に、アメリカ人研究者による日本のアフリカ研究のサーベイが掲載されたということがあった。このような経過を経て1992年9月にロスアンジェルスのカリフォルニア大学（UCLA）で日米アフリカニスト会議が開催された。この会議の

内容を同大学のボズナンスキー教授と私が報告し、将来の日・米・アフリカの学術協力のあり方について討論するセッションが持たれた他、日本アフリカ学会の現会長の伊谷純一郎教授を含む4名の日本人学者により、「アフリカにおける最近の生態人類学（Ecological Anthropology）研究」と題する分科会報告が行われた。

また日本とアフリカとの関係について、2つの分科会が持たれた。1つは「国際的視野における日本・アフリカ関係」と題するもので、2名が報告し、もう1つは「アフリカ人に対する日本人の視点および日本の政策の変化」と題するもので、四国学院大学助教授のG・C・ムワンギ助教授の司会のもとに、2名の日本人の報告があり、また日本から2名のディスカッサント（1名は日本で教えているアメリカ人学者）がこのために馳せ参じた。これらのセッションは、日本人のアフリカ観を深部から掘り出して分析した報告から成るもので、日本の官製の対アフリカ政策とは違った事実を明らかにしたものとして注目を浴びた。

大変ユニークな報告で注目を集めたのは、「アフリカの独立とアメリカ黒人革命が日本の黒人研究に与えた影響」という題の分科会で4名の日本人が報告を行った。このグループはとくにアフリカン・アメリカンの文学の研究を続けてきた学者たちで、1960年代以前の日本における黒人研究と60年代以後の黒人研究の2つのサーベイが報告され、「黒人研究の会」の活動の紹介が行われた。実は「日本アフリカ学会」と「黒人研究の会」はこれまで日本においてあまり接触がなく、双方の会員になっている者も少数に留まってきたのである。今回の全米アフリカ学会が、アメリカにおけるアフリカ研究者とアフリカン・アメリカン研究者の再接近の場所となったのと同時に、日本のアフリカ研究者とアフリカン・アメリカン研究者との、ほとんど初めての出逢いの場所となった、というのは、大変有意義なことであった。